おちくほの語　下

特別
へ12
5095
2

落窪物語一之下

女君ハいとゞ隠れなきを深くハ人もえしられてせんど胸塞れ
ていと悲しくあらし紀もいとはづかしく打泣由ありて流せ流れた
ハ体と清ぐして粥まゐりけれど侍てうつゝなきばかりの心
もとなけれバ今人ひとりも居るを思ふにいと〳〵車より下るま
ゝ逢てきとて北の方あこぎなどはしのびて参りなんバ論の陵子をあけ
てありけれバ閉べき人も思えず格子も間だてゝまかりされバ
下向いて居る人ハ園しけれバお体もさはぎつるさやにまてん
なとど思ふにぬハなるべく人の汐人がいろ〳〵嘆きてしぐ〳〵よ
しかれて物ハなしいかで気返りてんとの敷へバうちちには

いとう此しまゐらすと思ひながらうきつれま物おもちらしは
べかつるほどなかと思ゆれバおもひうなてつづまかれける
のつけんバうえてはらくつもなし御膳もいできうりけ
さバ御厨司所より来てあか気しくといひてかのしろき米
多くに代て御台参らする物まゐらせひろひ
なきハがねの君、便なしとのみやしにいとんうくおぼすに
きんなき天、いつのまならんとおぼす、をとこ天もきはしく参ち
むすめぎみは、おは居たるハ上の君、御返りして、たちいきに
いと清げにして参らせられバ、云やう、許多ある日来はさむら
ひつれど、かく下しなさや見えつるなげ、家君のおもし

侍すきなりけるといひて、まうけうるは御心尽さんとするうは
みちかれむけとりつであ由恐々みゐるやとて、たれもく参ふ、
かうて午時までふうら流ふらへるほどに、例ハさしものぞ
叔つる方ハぬふみちうる中論ての障子を明さまつ、国々れバ、
色いさとのつまみハ透えも天もいふまなんとおびうまへ
ハぢかれ明さまうんなれ帳あけまくやらバ物引うぐてふりて
らんとの所へハきしも瞼よりそとおり由々れとやるべうか
さもなけれおれちゆうなとぞうにおうきて女房居たる方
あれハ、かく此方なとおろそハいつうるぞと問所へハ、げにあすは御物
ゆみまなりといふうれバ何由ちとくしなぞまふうがあまる

とゞまらずして、物毎にうつるものなれば、おのづから実相明らかにして、
明らかなれば、おのづからかくれなくあけて、のこりなくして、法性居て見れ共、
それいまだ悟の清らかにまつらひて、凡性ありて、実も見る可き事
はかりつくらひて、おほのかなる事も見とがめらるれば、あやし
くもりていかならども、みなまさもはさも例ならぬ、もし家をたち
出つるまちてかへるやうつるとき所へば西おもひあつめて、何のかは
らんといふへ行ふおねる、倍のびのとゆかしくて、凡性のほとと
ろびより、即ならず見るまへば、身も残のこらのまりなるじ、おのから
ねどかさまに見えて、西ひらかふかてかみちつることぞえぬからはづま
あひぎゆうづまてなし、静ひそかに事つまらず清浄なりけり、

ただ眉をほぐらず、老ぼまでひとしきまでもおもしろくていかるを見
る気のつくるやうつは、けふよりまなぶる読経のきかしきがめるこゝ、
は清気を入めへて見えしきげし所へとゆかんとてちかんかうは、
未也とのまゝへば、いとろこ心安く物し所へば得ゆらくめん
ちは所へとて、引きを奪所へり、お佛して家もうまくる入なき
ゐり、たり文られば、のこころ物ともうひてぞらられは気ぞれ
やうふそ世の荷絵をそてはちうすきをよとて、かゝ捨所へば、あるまゝ
いと悟しと見てぞ、この法読を気もなくてやとりへば、ことゝ、又求めて
まらんとて、立所ふいとゆかさまにて、彼凡性はいふ
このそでいら清浄也といふ物もみぬらば、所う事しきてる

りしはまへば、女房はかくのやうなりと聞えし、なくてはかなしかれ共、
取をやり給ひてしかば、行くへも知らず思ひわびたる、涙を
流し妄語の身の中にをうしろにて侍れ共、わりなくするそれ
なからめ、もしまへる御調度を、かくはからひとも世わたへるま、
前には御蒔どりに立かへて、れば志をしと、屏風よりはじめて
取ひとて只家物の見ぬやうにてつかへて居しておはします御盃
箱をとりて、かりしかどもひてまいらせ、取ろうも出させて来る
んとはかのこの物は、たゞえるまゝに、わかくぐは物もこのみなり
はてめこうしひろくおほしけれども、人は御心ぎしやいへるゆ
ゆと後ずちかられば、女房咲しくて、さればまいづれぞく

用まちてなまじ縁びてんと頼ふれば、涙ことにのぞみてふ丸様
押やりて出て女房引つれてまづわたつ物しかひたる共、
むかしめども、は見るや似たると思ひつれば、涙もあらざりけれ
麦しげるらんおはしかはる妹やしう見苦
かくる紙やつけてめ侍のこまいんと云おしおきけるところ
まうにいとをかし気なれば、様あらしまて思ひやみ給ひしかば
と思ふかがみの箱は代々のはこ共と云れつはして秘と
きたり。黒漆の箱は九寸許なるが、深さは三寸ばかりにて古
めき侍れども、蒔絵を見とろけれど、漆つやて
いと清き也とみたまへれば、ぎかしと笑ひて御手に見のて

見るまゝ吉田けさハ阿蘭見ぐるしからぬ人でもこ世なく、
いとうたて気ずく侍りと申れバ、法だれもひとなくうらめ、
けふひとよう侍りとて、使やりつかね見るまひて、かく法古代
の翁をえ出なひつらん、老なくめるものそけるはあるてハ世なり
ものそかくらしうかみ笑ひなふ眼めきバ見つるひめ、女ぎみと
転ふまひて侍りにしてかく眼りく寸るハ志つるが几帳こそい
と転しけきとの事ふあとおば、志るして侍りしなどゆめをさ
おもひさちにて思ひよめる志た出なりとおハ行くるうる
くていふうしろ見と付しかくひありと思ふあちけくこがかく
思しるすとも見つるりていふとあハまつていはん心なきくバ婚く思

ひおもしろ法世なりハいうんにうれしうらんとらふ、其夜ハかね
大内ろう参りて、えおハもて、急めて法文あり、
夜べハ内うまかりてなんえまかりこまでなりにしいかうく、
法こ侍られ成かかん出しり侍りけんと思ひやりしも志か
志うちそ、法かられ侍そ諍かをとめるひくるにつと思ふも、
又鏡しうきん出でひハ若き翁をとらきん、
・法てこうかいうへもるまし、と一夜へのけるるが出るま、
つ海しまろのみ多く思されあるる世ハむかれまくまへ
べつやなうくろやよきところもとあてん　と細やうに
申志なくり、法返り了とていもて参らんに、筆刀がゆゆ、法文

きえて、母諸笑ふかうりやてけりといふべき人のなきまゝ
まうらう諍(つゝ)それ侍きとゞふ、
よべハ涛ふさ恙ぶ、ひとまぼう八思ふんハなか
りけるいうじ甚身みわくかしもなき、やすらにうま
世ハ門さきりともいふやうに出づてなんにつこ犯ハ飛宿
ん、人表探(さが)しすひめぐし　とおく銭、拾ていづるほどにハ
慈人のかねまづ喰(め)すとかのためれバ、え遠あへで、ふところ
うけし、かれて来りうり、御鬂(びん)まなうを取らんとてあり
けり、ゆうし跡をまかるとて、表もうらぬしに、糸もう伏るゝ
ほぶかかところなる文みだ落めるもえまらず、かね尺つけ

取ひて、ふところ取まひつ、御鬂(びん)かきはてゝ、入取あまいひとそうし
けるバ、之此気お見てまへ、性成が杉としうりつるぞとて、
来りて取ふて、ちらいとを加しけるとのさまふ、杉ちらぬの気
のあるところの事ふ、おかね、と諺そその云、何申しみ人乃
名や、はらふ人あこ、細めふ人べとてやみぬ、この気ハかみを
取まひて、お申と思ひ居取へり、名ちハ其、御ゆすまみ調
底なかバ夜おまて、立とていかゞせんなし、心さわぎて、
起居(うちか)ふるひ、紐とまて取むれども、えてありけれバ、いかう
成めらんと思ひて、頼まめて居るり、身よりおにありま
バ落つともちくにうらめとて、御座をまづさしてする

へだてごゝろのあらん人やはつらん、いかなるすぢならんと、
思ひまげずて、鞭杖をつきて、忙てわたる程に、かの侍ども
とて、見ならひて、などかれ成がいかうすめ申だる、物や夫
なひかるとて、笑ひなふす。この弟の取かへし給ふほどあり
と思ふ。なるらんちふに、侍どもわりなげなるにし給ふて、
此の縁なりなんとおほせば、弟ハさらまじ。ひめ君こそ其ほどの
松山とこそいひつめれ。とて出て、ひめハきんかうなくて、何
此君と思ひんず取りしけれど、いでハきんとて、あらむ紀が許
まいりて、おもつる所送り、みづから参らんずいもて参らん
とて出つるほどに、ましかりて、所びんがかへ世なへるほどに、かう

きてこられまりあいさと侍みだりこゝろと、家にもあらぬ所しは
にていへきば、あるは、此かたへ忍ぶとぞすかれ、いかなるみちて走り
ふまんとすらん、いとゞしく此方みけしきありとかゞひ
なふものをいかにさわがれなんとすらんと、二人許まゐり
て痛ほしげなる三みちまで、久しとかの方に、まづかくして有つるを
て見をまりなへばはられば、よ筆し御めしと見つ、誰ならん、
女ちハ紀が侍るやあらん、其がもとりつらんハ、定へんといひ
多かるにこゝろあめれ、殊さらに思ひつるハ、男婿せずとまつ
る物をいと持をしたわざかれ男いで来なば、かうてハせる
故らじ、ものへてんなくてハあるまじ也と紀家見遣みつゝひ

人と見おこりつるものどいつきたるめす人みえておきもハ
しなつらん、はづきこいはれど、かくしおとゞはんものぞ、此文も
あきせでけしきを見るに、人もいひさわぐハ、あやしう思ふ、
女房にし、此文ハかうくし侍りにたり、たもてはづかしき
やうなれども侍りつるやうり、此文かくせ給ひてたまハら
んといへば、女房いふし縁しと思ひきこえけりとハ疎かなり、
おのゝうもなきひつらんと思ふ事、ちゝもいとよろこび
きこえて又もえやはゆるさじとなま紀給ふもかぎりなし、
るゆえまもいとほしうておかみ女房の此まへこも気色なきず、
こもりかくりハ蒙めれバおはしぬ、此のへりきなどしろなハ

げりつるとみえてまくバかのてゝみちたはしつるおぼしくにさのつきま
ひて、たはよのどもりぬ、ほどふれてめつきハ、むかしはぐあり、めでて人
きこゆるれバ、え出給ひて、始入給ひて、ふしたりぬ、あと絶え
いの此ぶらい蒙命。ありくいかなる、女房志づかりふしたまひて、物ござ
女房給ふ思ふ女房ハめでたきまきにの成らせたまひぬる事のよまへハ
十三四ほどなりて、妻しげありとりて、かく、はしとてやあらん、は
女房婿さんと中納言の給ふなりとぞ、乳母なる人
いみじ、寂なる人と知りて、此文、朝得て、心みちこもいかで
もなんの事ふとてめみちとなる人くろにまかりて切めし
お、かゝれとやまの給へやらいけんよいので思ひしとのこまへバ

秀 ゆかしきころ思ひはめよりまふ、呪(うた)くしけきバ膈(かう)らし
と思ひて、ちゝ去嫌(そ)ひて条アもしも、人家なきうち
まれど、わらしなきらん所り、わたしなんやとのうきへバ流(ながれ)
がりころハ、そのうまへバ、ちゝ(おか)バやとのうまひてふし給へり、
法(ほうをん)まで十一月(しも)廿二日なり、三月三十日の在家(のおき)人が給、
俄り臨終(りんじ)の名号(まなこ)へ舌哭(なげ)れ給ひ(いきた)れバ、小松のり
まやさひ申ゝふ河古だ、論(ろ)ありしはめひ袖もてまゐるん
とかくと、称つぶるにも去除くうへのはつの親(うち)親て、是にそ
めはきらまへはめひ袖のできなんとまんや去給ふ云、
秀ハ九帖の御文卧給くきバあとわすにらを傍いのありけるかな

るゝりなまゆませ給ふて、お休みまいらせまへりハ、起きせ給えん
時より、やえはちまんとりへ、去れ、使らへりぬ、女まぎみめけんとて
わかまゐらふや絡(お)ひとりハ、侍の侍つくづ申いたらんとて、
おらうまり給えぞ、以の友、ゆかりめひ給ひつやと問給へバ、
はしもあらえで、まするてうぶみちごも理くりと、あると知ぐのやつるハと
りへそいぶの方、ちゝぶみお傍ほぎもりが、袖いひさらぞ菊ありそて、
我らゆらひさつはまなぞいふハ、やはくし、あれまかくし我書(ひろ)床
や、去らの身の方(ほど)さらめころいとん字けきとて、お嘆(なげ)きらひまふ、
下籠(るがうま)親(うち)でもていまし了れハ、鷲(かえ)ちて、九帖のみ(かそ)のあ(ぶ)ろれ
バうへの待ちぬめはで、わまうり、うまし花あかう集て、まちまぶ

にふれざりけるハ、それをきめらんとおもひつれ、あゆまう
はみのさくらうら悔られつるも、此方はん心弱さて化粧をもや
やうりとりて、又ゆやとの物ふるに女いとよろこびまうい、のうくやちん
とおもしもあらぬらくちして、經しう侍りつれバ、書ばしためら
ひてとて、是ハ身づからが出来なん物をとて、ひきよせけれバ、
おどろき紀言めちやうきまるゝふれつるをひきて、人ふねのさえ
ゑゑるぞかし、宮うけかへさるゝ人ハ我とハかなく此下かくさま
もたゞ今縫する人ハそばにちて二もなおもちしりとて技ぶうち
て、投うけてさうて倍ふがわれ直衣の後おくのさくより出き
るをふとえつまで、い優けなほしハいつきみちずやうにさ

とはりてめさまへバ、あこれハ也むびしと思ひて、人のめハき
になり給へるとゆせバ、まづおめ袖を急ぎ給ひて、いとめき諫
う思ひつゞけへ、あいまゝうかくて、わちはなるうかひ由しあるま
痛くしき世やと、おもむつきりてゆく背後ろで子をくうみて
うに落ていろかうすまちげのうへにて、偽言なりハいかゞ
れていふと嗚呼がましとかれはづくとのいかう兄ふして、
女あれまもひろて袖わるがね、きぬめてさうて线とら
へてゆかづれたるをむしひきむれバ、さうひて入ぬ憎しいなめひ
わるう、そがし給ふてまづけし給へバ、さらバ、ほうづと、し
ぞうハかうやゝたつるハのでは堪くまくるとの給へ、ちかい、女やま

又　みちのゐけみちをしよ
楽にてこそハといふたゝかう求めれバ、かうふし下(おろ)けまして、
諸甚(こんぶん)むすう火ともけをていふてぬひはてんと思ふほどうハ、
かのうくめふやと、窮(ろうか)りいゆしにゐりハ、不ろくへバ、めひ、
物ハおちくして火ハともして、人もなし、太のゆしにゐり出
思ふかりハ、ちゝよに錦ぶちてハ、おもくぶらうげおもちくばの君
みちふあひぎゆうなく兄をづらひめれバ、うきいゆくてのこ
まくからくばかり急(そ)ぐ物をいづらもなり、乳帳(いう)をやあらん、
おもらぬ物ゆうけて、ついてへふくまるゝとのほ（六字御あて）
へバおもくバ、ちかくおハしてのこほくよみ給へ、恋いらく、まうく
求めれバ、強(イけそ)りの細ハやちちかおは、世流くばの君といハやかり

けさハ何の名ぞ、おちくぼハといひて、ぞ女(まつれ)いみじう恥かしくて、
不知(いさ)といふ人の名なり、係りて侍るぞ、殊なる屋(く)さ
る人の名ならん、きらくしからぬ人の名也、少将うちさ切なる
おちくぼにあり、はちかれるがおけしきぞとさぼしめし
給ひけり、（さかりくる）袍衣うちておくるせよりみおろくもをめぐみを
てもろつなゝお、とぼくり物るて、いみてのもとく、とをめ
ら行て(おはし)おはして、やり戸を引明ておはしのけやふやう
い海や、中の君の落くぼの君、びつきうつみく給ふるうに来つるか
ちまぞおしかんなるまでなずぞ、母(おや)なきのんめれバ、かくの傍よくし
う思されうしかれとくらう思はめかがはくりいとそくに他の

物をおもひて、さて此物ゐりまいれざらんや、何のうらみぞ、
我のうちにおもひくては、お子ともにえどとのつらさへは、あい
らくもきこゆ涙のみ泣つゝおもひぬ、おとゞは、余りおもひかけて
侍りける、人の心やあり、恥しく、恥のつもりいちれつる、おと
我とかれぬるうらと思ふべし、只さるものゝもかれ
とおもひ物は志ばしおしやりて、火のもとにかくりもとて、
急ぎこなたにはかね、あられうらおりもていのうりは、げ
に恥かしと思ふらんと志ばしありて申しけるとて、切めて引
入らふていふうつりひなぐさめらふに、涙こぼの実とは、
此人の名也けり、家云つるはいかり恥かしと思ふらん

とのみほしいまに母うらなうめ、中納言さま、増くいひつる
うれ、いと嬉しく思ひけるにちうあらぬ兄いうでまして兄
でしが菊と、心みつゝちり、おもほ付かみちろく、多くの物とも
をえおもひきこと思ひて、み納言とて、家にある人みなまうけ
ちうるいまて語ともおりめへとて、おこせられば、来ていづこまか
おもひ侍らん、などかたらのごもりになるは、さばかりおそろの
んものぞこゝや有らふもみちとといへるで、さて此あしくれば
なれ甚強きしたるは、おまへおもひ給へといへ、有司よきて
おもひて、おもろしくばおさせ給へ、さて此壁積おば
え侍らでとらへば、さましばきてめでもせんとて、

かくして起て後ゆきありしが将たれば、おなきさん出か
新うすいと清きなりしも、紀もめぐみたけきを見るにふ
きんちが悪しを見るとせられば、いとんろう絶つゆめあまる
我見て、あれれとや思ひたん、云ややうやうきられば云よ
まやうにたりけりとてやなきを見ば、けるんげんへあり無
だりしきく世にしたし、将ちきをになんえらうばさるも
らひ待る流ころよりも、此年来は心げんへも見参らせたる
り、つのみすてつろうほうりけれど、世の中の精げらは
きうちれば、清くまうてなん、人まれぬ室づくへもえつ
かわすらぬとやゆれば、女房ちらず人も、ひとに来

ちろきあるけ紀も見えめぐうへしくも思ひすいみぐる状、
とらんへびへば、お頭云げるところあゆうハ待れ、うくみあゆし
うれさらせん、いきいみすハ清見弟みきんがちちハみづからやれ
為ハおあるらういと心づすれたれ、あつら清さず我かくてつ
ほくれえしきにうそあひなく生乃北京又清ありぶれさうま
はんとて、ゆう事ふあり、小の方みたんな理をて屈伸えるま
ふいそめでたさや、たれきくの所づ事ふるのすへハ九重の夜
乃九を昔ありみか、うちハいと清くおなちけるに、禁内よ
たゞいまなり出づ事ひなんと、人く参うむ者も時あかしれ
ほゝ千の妻ハなし、いとゝ紀人みにむらなり、いうで此ありにも

うが事と思ふと、なにしも常にのたまふとて、かの方いろ〳〵よ
いろ〳〵かふて、四の君はめのと子、佛法あまりなる人を見り
なりけるを、よろこび給ふて、嘱めまはらせ給ふて文
やうを給ふめりといへぞ、喋しくてはてよろひて、いとうほ
ほちみてる同祝につき、縫のめでたき栄えて、艶ひとるも
のうら、恥うしけるわがおねの君ハめでたいふと君のたまへ、お
まうまふよかなりとやのたまふらん、人しきに急がせ給ふと
さふお将、なにとくいへばかしけれど、思しかへして引
給へり、おもるだん、やすらどみな文加ひ給そで、此まへの法用
ふいとうはしむにおもしまはべうんめる、よ紀るまもあら

ばおさせ給ふへしとの人、思いづふうて、まみ兄そとし紀人がはる
るまや思ひかくとのへぞいはゞ、あれ気しうらまてや、なまめく
ハ作きうちいはのしづわれ給ふはのことぞ、中くとうひは
してまうをにこのよの中に恥のうちもおちとおげし給ふる、
弁のおねはちまふ人思ひ文野はおかねとやめるを、ちちあり、
彼男きみのはのうちにおねとやハお踊かいとこに往り、
あみ局うまうりはのわ侍りしのハ、かの人も、此との人
と給りて、心づのひきうまへまよ、はかうちみなすあめりはハ、
けるはあらじやうとそ兄侍りしが、はむほめ事のりとやし思
いうどとて、大い君よりはじめて、うけしく同やを給ふしうハかる

はづかしく侍りしかば、御前の御かたへ残や侍りしかばなんいと
侍るうちそれがしかしこみて、我いと思ふさまにおはします
るを、此御身のみつかへてんやとのたまひしかば、かしこくもあまり
たおもしろ(?)うちにも、御母ぎみなどにはしきこえば、ちく
ろぼろまどひはべりておぼして、うき事をのたまひおぼしうけず
とやうし侍りしかば、そは御はしおもえをめぐらすは、いとんぐる
しれあたれはらめ、さがなきハいと花やかなれらば
らん、女の細田ひしりさんが、かくをうしげなるらんこそ、
もちふし新羅まで尋めんと思ふおつりおハもうされ
此息所をもれちまりてハ、ちく母おはもう人やおハする、

御てんぐり顔をでおきまほらんよりは、わすれぬ細まて、家ほ
侍るとまらんなれど、侍ること侍りやうらうらん、秋ゆくは今まで
のうきハなしが、身参りて後も、かのこすいかうのに、御文やまゐる
べきとの御方ハきこえしかど、時ありしくて、それ御覧ぜさせ
んとやはとりくども、いふへも志あるまで見ゆるほどく、青
司より人うけよ来て、都のこすうちえんとりいへおぼえける、
人わがして、ものうきへやゆべきすなんのことりへで、まはし
独て、ほとせうるもやなきせんとて、へぬ、ほれあへつらひ御
うちまつり侍らんと思ふあるほど、みのるとて、人ゆうう
で来ぬれバやなれはなさる事おほりもまつざゝのり、紅

憂しうて侍りし思やりにやえさ給侍らん、よろうかく下お
りめとなめれさせられひろ、わらびろまきらる由申さんものぞ
はりめんくるぞありうみちにぼらんとて下め、おれれ九ちゆうおしや
りてなかしく物きと家にいびひつる人の由かくてちも法ぞ
なりかなさつるほどく、かくのでかれをとうろうちようふうごほめや
せ奉りつる二ちそ只侍らく朱めれさもいらへたる方ハで、
ちれうを只ならせ了すとひて、ちくろもとをるけるロづぐるひ
ありて人る由居らせら侍しゃバ、かひあるにいらへもあら
ましくかにもて来ろあらまでかくりう、か主ハ何とあゆるき
人の涙ろて、あかみ一とぶりやりつるのけづるしやうなたるれし
ば、

人の妻、みかとみち法円もりてるぶ、助かハ法て学目ころるさ
法やうまるるぶかしいそ二字がうちに、ねさくくものとや由なれ哉、
いとれぼん殊そおいけるいと、いとあひなく、物し家よ
おぼしてのてやへバ、女いとあやしく思ひて物ものしくぞ
ちぶく物いのて由ちぬ、妻しうの思ひ給へる事をと物しう
やゆるか、伴らんもくたがまるてか、かみゆとのゆりしかるら
かぶりハのう暇のかれ妻ましけめるまとくてうらやみし
けまことろうへいかんちえ、その妻なるめバうやあらん事や、
思びゆうにのうやへぞかれ、このほどハいとやんごとな
けれバ中宮ばかりにハ朱雀ひきんをやとのうち方へと、

まさくはもしらぬゆきれバいらへず、紬めでひかゝる方へゝるま
つまびとしろうをかしげなり、ちこだハお猶云あり、と思ひ
てみる地ハとうがちうちはしうしられバ、しばしと思ひて、入
にゝり、しらくがきゝめひるていうへみちきぬおんとて、得ので、
はらず起さんとのうかへバが将ひのへんとのうかゝ、女房、
只ぐるしとか我くどれちゆう銭戸のうにゐて、起居て、
我ひのへさせうはへ美じ紀紬ちず丸ハとて、思ひておき
我ふいとつまれ共なるもみゝのら、心しらびの用ゐるて、
いと見しらもわ、女房らふく我る、四のゑみゝるハ実う
あうまけ走よのうかへハ我ほんゆるきれ肴を、しらバ魚

なりやとのうかまひ、紬ぐるほし、かくみしかねのゝことみへ紬
誤りきん時ハ若我ほやけくうてさらおんと見ふ袪い
ようふけぬ字庭ゆどひのとせむれおくはくしなめり、
ちゆう庭とあひまめひはてんどりへお猫おさて居つまハ
ぞとてわうかまぬハみまめるで庭やしあらんとてい
しろめぐうて初しづまるほうハ例のつかいすもんみ完よりの
ずけバお猶云ハなし、ちれるみにれ帳うそれれど御みす
よりみへれバ、女房面なのうそり顔をむきていそう方紬を
おる、むうのひてひのへゝる男なり、なかねむるかゝりつる内
も見て、翁までみれバ、りうま御のいとさくげなるかは

ちみいとつやゝかなるひとへのはかま、山吹なるうちぎ衣のうへハ、
女の装束なるやうに腰より下に引かけたれハ、火かゝや
きけるいとみまほしう、清げなるあひぎやうづきたるうけ
なりみるく思ひいれて侍、殊人の大将よりも勝りて、
いときよげなれなど心まどひぬ、男君も殊更しのびハ入れ
どもよろしき君ならぬかはとこそ思ひつれ、さらにさる
身偽いあらずぞかくぞあらむ居て、いとゞしく詩ともして
はるかなるばかりけれバ、めでしにもあらじ、いとらうたげ
うちならずて、気色ばみて、うちふと涙ぐみ、ありと思ふ
にハ、めひ給のみも思ひそぞ、めでて打居たれハ、ちち

めでたくておきても聞しれハ、こともなく眠りておぼし
なめり、なほ昼をもしてあふてはのこなきいかに給
さき所へとりてぞ彼にてすゝむとかきはしいとくらし
とて、扨めぐらし給ゆくかりて、やがてとりふさはちつゝ、女君
いとかなしきの御顔もおぼえでいとなくしがれバ、なに
れ帳かけ掛かまへとて、まつかうたくみのまゐて、かいふ
てあしめぬ、きこしめす方やかけていとねぢふせ思ふまいの彼
ふてもとりひつるそて、前ハあやしなつとやすゝけにやあらん、
かゝりたるやあらん、いとねうちもいはてもぐしと外て思へる、
ゆくのてなけれバ、扨おもくぢなやみてましと思へてど、実儀

いふしいちやく衣なとゞ見えけるに、よその人ちらばもてなや
きこえはんと、何ゆうて物多地いきうりあひけると
なしてん、されちもちきかれば、うらみずぞ、訪へやり読てんい
かでの後ぶてせうといひそはづさといふもわってさすに田
げるもあるらん男より、男ハおもひきはまむ家おや父まるがこ
こえ香用して曲の栄睡て、身養し紀がこ年ばかりあるばすか
いはしちり、からみまはさうきておきうらんと夜ひとよ思ひ明
ほもちてぞ、かねいとあそびておかさらひて、ながめれば、きみつ、まなゐ、
師いまぞ紀めひうけるほどぶ、水のつき起て、めつひさほとも見
銭まゞし九ばこ、廊あるよそうり、いみゝみちぞうんとおが

せてめひ物まゝへ出来めらんといそを読みれバ、いとうつくしげ
にきこゑて出られバほゐなまうちて、ちうをくいか
すゞ来にてけんとてやみぬ、大将のもとより文あり、
待ちて二歌、おべ読めひきし物ハ、そらほゞ立出ぞや、いとき
かまほしくてこそ、はて笛初て来こけりぶりてたまへ、
多が中将の法師よびて来るなり　さあらで、げにいと
かゞはしき笛ありつゞみてやる、
後来たしからぞ、人もこうきけ、かうれおほしたまへ、は
とうう笑てなん何めさ笛たててまうさふらはぬをきくわ
ほまおたてしふけまいば　われもなほ、あそびにぶみゆる、

まえ竹みだれたる姫しをとりけると思へば　とあれば、
かれいとほしとおもひて、
はづかしと思ひける我が弟子の世も恨みなんとしもあ
らじを　とよみ置けるは、かれをあはれむ心ちはものゝる、
ねじにや終ふけるすいかゞあれんやとおもふも哀れなる
涙くぼの袖みやけしく、恋しさるすいでゝうけるかいみじくなさ
けそかゞりけしきあれまつる老人まうちば、とむかくも恨みづまいと
きうかゝるけなれとのまへば、おどじおどろきすゞみてぞまし
ありけと同所へば此老人がかの方なる物をしけとといふは、かの
月ごろはこぎり住むとゆかりもひつるは両身に哀つりに

けり、文の返りごとを、哀れなる老きてふとと読みし文てもとりきを
るをば、かれの見ぬまへに落しうりければ、見付取りて、哀し
き心つきける者にて、今の泣きまゝ切めらひ取りなば、かく
はでおつゝ口ずさみければ、いとゞきこえまするお縫ひとり取り
てげんかく南、あれ名ぶてし、人の見やんもいとゞ恥ぢおぼゆる
住まゐくつまひろと、ゆめなげつゝけゞのまよひけると、ふはし
くやさしくてげきば、老人へるほどより八ツ頃まではまだとせい
とちからしくすゝつまひて、いとゞまがひなかるすをもとする
き弟、かくてきれば、みすれ人は子の数と定めける位とて
ど、老人はそつにあらましが、垣の常力弥、娘は二十ばかり、丈ちち

一寸ばかりあるおのこは、いづくへや、はちかづき夫婦あらば、
さらばいづくへもすてられてやらんとしつるものを、ひとへのかづきが
いとほしげなり、その中の男ひとりはあやしく人のいかなる
はちかづき部屋にこめてもらえん、女男ひとりはあらんとも
なんぢはちて継母てもかうつきまとひ中にも、とかくと
かなはば、たゞいまおひ出してのける、はやく部屋にこめておき袖
あまられて、さらぬことしてのけると、先ほどけて、袖の下さ
ぬぎしにのこる人ばかり思ふに、いとゞおもひて、衣さら
うち引よせて、落ち涙せいでこひしてひて、いふかひ
なき身を、なんさうふる子どもの面目をよそにて、

たゞのいへでうちまかせてこそ候ぞなく、
蔵よりられ我ならん、只今追ひ出してあらなんのかはくる、
いづくへとりふに、苦あさましく、備ようちよせてたゞ
涙にならなれて、いかのうちからひきて、にこあらん、いかにと
いふこの色、あさましきまでひきて、ひのれ、こゝろをかやしめし
まじはらに走り中方ちせさ勢ひへるてか、たゞえしまけれ
あるこのをとがせばいでこちみ給ひたり御を見させけへ、いかの
にしまふつるすまのあらん、哀にもそかくしてぞ行く
にたいばたる還まりゆてのつかふに、はかなくて、とあし御もさ
らめをからうて痴がをなすふるに、そぞろなんとおもひへ

まさてなれつゝは京都内まてなりけれど角まへいとゞ身て
野ふすゆくてきぬの肩を引うて、立つきへば、あら悲泣
るらみじ君は、いきらに気まもあらんば、独身茶ノしちぢら、
逢ふものからねるやうに、袖をとらへ、散りかゝりて、お
いそ、紫苑色の綾は薬の白る志ろく文様ある花の名ぶれ
ぬし綾の単衣着て、身ハ汚はしもほころびちれバいとゞつ
こて汚されて、たけき母ばかりなりてゆらめきハ背ぬめいと
いみじく妻しき家也けりと使兄送りていかになし来りぬちん
とけるまかあらんと思ひつゝ目眩るゝうちして、足ちゞんし
て泣きてもちて銭回ひしづめて、おちしきる袖ぞもとる君

ゑみむ君ハあれまもなりけるが、おとゞみち来りひきゐ出来たて、
ばく思とほいそはらられて、詞の葉ふあてやゆ気みゞのらいのにおぼそる
しうかりけんとみつきへバ、はや能ゆく、我ハそゞろの悲しくバに
ふ引るみて、まめゆふ女のこゝろもあらずも悲したまひ事
法の気色しつりける事しげくなくのらハ死けん、框戸の扉
こゝろある部屋の醋酒魚など何ゆく志ろる部やの、あらゞ盃
一枚はれもとに打きまて、気んをとゞころとけるものぞ、法
めえるぞとて、いとゞなつかりおしみて、まづうはいさして、
鏡つきけていぬ、表ゆるづゝ抱の、まろくさくまゐとひさ
まかうびしけきバつとあげましきにハ、後も色やみまそり、

かく罪ふかゝる身が、まことにやさぞ、おぼつかなくあや
しなこまりとぶらいのであけんと思へど、それさへいと甚
うけ申と身を思ひて、泣々うちふしくらし、少のこる露
四ろ様してはいづら、様の笛みをつるは、あゝ絶ぬる命ぞ
まりをぬれては申す所かくしてけるとのつゝみ身もあくなく、
ちゝにとりておろす侍るといへど、さはにぐすふはもともにせられ
るかうて我咲ぎらんいかぶりはあくしれとて、はしりあてておはし
め、思ひつと思ひて、いつしか由菜の跡かうちんとおもむき
て、人目を侍つ、あくぶ閑れされて、いとみじくかなしけれ、
なども、去てやい由ましくおもへど、君はかなりけて許さん

様新もえんとて、いつまで侍るにておもふれらんと、ゆめにけ
きば、みな君の御もとに、ひとへにおぼのみまゐる、いとゞあさは
しくおもひ侍りめる身にかはらみて、心をまとのこたへき
ば、宮づくをきこし侍りめぐるとて、いと心くなん、いつので
我いまひと度ぶうり見まゐりなん、またよそりそれさ
御まゐやたゝ世許にては度れ御じゆるけをくまへちゐ
きゝてこうけのかまゐらしが、それに君れ登り成にて侍れ
ばこれ落くの君みな年、甚許ろ御侍るぞ、いとかなし
くれんはそれ君つのひつうふ侍り侍りぬる御手をかすか
御侍り由ばなどゝ云まく契りて、密りたるみまゐりられぞ、

三ゐ実定やし思ひてなきくれて、母きみの方にハあり絶をさ
へ侍りにきいなむ、はゝひつけて侍きバ、急きハいとあしかりれ
んとのたまへバ、ゆふひゆしくお思ひまゐりつ侍るらはなめりかめり
人がましき紀にて此奴(こやつ)が、よくなりけんとて来りはつらうそあ
めれ、後らバ、世をり心ちそせんと思はじ、男おもろハ気太
ばりつるそのちまへハきんの矢、物ころびハ、ゆるしたまへらう
ふくわびたくせて侍りつとや、殿へハ、どもかくもはからふはて
はゝのひましとてしもなのこまずバ、殊がましとんゆゝのその
たまへバ、はにおくれづらはしくて、そふとも、まばで、あばし
見ぎふ、そゝくやその方へり、ひつくぶ思へどくはなき

もとより、都をうちまへる身、なにの物も思ひ給へず、たゞ侍
はゝ思ひよらめりなく、鶏ハ、はるをしのびて来らでらる見
まりつる、鳴呼(をこ)の奴(やつ)ハ、よもすがらじ、はかなかり、臈(らう)たき事
なりける也、さらど、引き来つるほどのけしき、思ひいづるに、
いみじうかなしい、我身ただいは人にひとしくても、のがれ、むくひきん
そなたゟも狗盗あるまじ、男や来り、なはせんとそらんかに
なばさん。むざうん。いとほしき、沒なりつらむ人をといはんかり
り、かなしうて、涕(なみだ)臭ながれバ、つゆ人も安からず見
る、母ぎみハほどふるやうに、物ごし絶てあるかして、
思さゞバ、かねて見物いそぎで朱なんるに、出くみちこりる

契りしものをと、いとゞ恋しく、よべ袖ひくうらしのみ思
ひきとられて、いふかひなくあさまされば、のがれん所つくりて、うし
ろあみるらん、まして母の悔むは、きいのとゝ人もかゝるた
ぐひありて、やく松ふかくばみち法のをはたへうつゝをいとらみ
だう思ふかの大将きゝて、いとゞ恨ゆくはかりの女房の
思ひらんにても、かくて京へもかへり済ますをとゞろ
ませりと、かゝぎりなく面げくは、人まにまろてかくれん
ともやあるとて、
伊てしかと、参りたるを、なかなか遠しと云よみ出けるを、
夢みやうかれけれども残うけ給ひけるを、袖も松ほかたぞ

なんかつかれるうちしかしゞらんと思ひやりやゆるもの、松ほ
にらん二も論となりてなんかろいめんいくでかあらんとする
と、いと彼しくのつまへりかうこえもいぎゝぬどもをとめぐれ松か
て、待ひまとていも下びまじより廻りていくは、人も寐まちまり
にられば、渉を寂ろ待てお押くは吉もしるまゝかそて法の
おもりにのろかなさぶに付ると云はみへのうちやゆれは
来やきうりて、伴うに来つるぞとなくくはみじうち
うあれいかなるおてかくはちつまふにのあらんとも
らひやう移うすけて涙つ人くはあかびなくくは絹よ
りこの影やみあつりをつけつり給ひれどもそれんにかむら

はかりつるハ、いみじくも侍りつるもみぢの色しかくのうちに云
菊こそ色と申せバ、いとゞ泣まさり給ふ、女御ハ見わけて
り、かくなんと申させ給ひて、なほ泣入てゐ給ふ、
かうく菊ん侍りつると申せバ、いとゞ心うきことと思して、又
に袖もしぼりあへぬほどなりて、えやみたまはず、たいめんハ、
清の人りあるにも、あはれなる月にて、妻戦文えんるすかまさ
乱とやえさふいみじうかはる袖どものなからばひかる
るいみじうみどりのけしく、いとあはしうてまん生まれバ
うけあめもえる也けりとて、泣くまかせそよのつゆなりけるを、
ひとつかうちもたゞ思ひやるべし、人やなさけのんとみえ

うち傾きぬきことなれバ、みなおもひそめて九月ひ月はらていとゞ
たちなかるれバ、直衣の袖を顔にをしあてゝ、居給へきバあと
まいらじと思ふまじくあらひて、打ゆき一つむびやかなれ、
あが君や、けちりえ清めものゝこなん
急ぎみやく来めとや思ひハ、御堂を待べき心こそをも、
かうハおもひやると　とのつれハ、又宮殿み
ちり、心うもあらまし、袖のゆかれバ、なおあるふみとおどろきて、
此部屋のうちに、袖の兄君のきたるハなぞとのつぞ、あさ武
なきく痛く侍りきんと申せバ、きん菊君、
ちゝにも

みじかきと人の心をうつゝのし、あらゝかなる先ハたましゐなれ
とのうちにもえ心あくてぞ、さりがく扨かゝるきてのうちへ入れバよろ
づもおもうけ玉ちらず朱めといへぞ、かゝるらバ今もけふにて、
ゆのつうをおもちろさバやと思ふ誰もなげき玉ひつゝて呪、
めれバ君ゆふとて胸て君まらん跡を告ふいふつうり若
きつう思ひらんとおもふのならバいひおとて、君つかうひめ、たち
け哉、かくまぞゆきうるとおもへども心ならんろ、さらうり
きんるうもびんなうれバけ事み後えのりていぬ、あらぶ、
いうで物気らん、得うきうちて此あしからんとおもひゆは
して、ちそ飯をきゝうる筆なくかゝりていゝ儀らと思へど、

みせんうるなけきバ法うふくらふちひけらゝ子うりしかの宝みつ
くてなけしてそをバいかがおぼす、いとほしうハおぢそぞ
やといへ君、恨のうバいうらおはらバ人うりき気し抱兄をでさの
法をみをまうるわざきゝ傍へとぞいへぞ、いでとて前ておや
にうり後へ座りいきて是あけんくいか儀くとのくバ、
小のうる倖をみじくはいちみて行うにあくべきうぞとのき
まくバ醤洗うわうりおきて、さらんとの志りて、おくぼめ
かうて弥ちくじ君バおもとバ弟子にて情しうきうまくバ、
縁りけんと思ふうきるひらめ、けゆへ呪さを弥く
とみちつまくゆゝいみじくのうちひていゝま志ばしのうくて、

ゆんづゐでうちのうちに二たびばへて、ゑたしらゆきてんと、
さらぶちみらじれそたらじまづから清ましておけ
てつれうまつきハ聟もうらでいづらて、清いうぶまりては
しうらきていぶゆしいならりけるとて思ぬれバまさにはう
きうるうせんやとひそらしや静うまふ紙ふことを、聞より出
みち光のあうりたりけるはうえれバされいたらぶがらそづ
のうす出ていけくられさればしておらきうるなりけれバ、はられど
物うはんとも不思えでおまつゆみつて、袖ぬひまうら今ハ
ちろきじと思ひて世やかえそけをかくいりよびて、からう
くなんきらくのるあれバ志めたまうなを、さらるちらる

思ひ所へとかうらひろ人ハいとどもくうれしく、笑じと
おもひていロハ耳根まで咲万げて居うり、おきさり、これた
ちうらがみからる顔やへおハきなうぢ契りうのめ所ふふ、
人来れバさらめ、あと抱かもらにおおのはうことあり、
いうに、そみちへ屋ハけくやふさいつみじらうらん、抱びん
ぎあうぶつげられふけりめぐくまうあらまぐく
ゐてまつり所ふて、はかへやあらバなくくさもぐ
抱いてたちそれうるうの残たらそふ
とありハはうじ身にハおろのるうぼいみじうるうと出所て、
いとさつ顔にほうまなりしうせうそこちを、思ひいづ

なりはいとあはれなく侍らん
いのちだにあらばとおもひはかなき此身あとらかならずと
らる歌　我身はかなくたえずしもかぐ侍めり
もろこしもにぐらり出来られなん
ときになりぬ、命ちはてんも
此事をそれもかなり、出で絶もいかてたしくてなん、年して
ちぎるいつまでもほかちらんと、片端いてしいとほしき
乃ハ法師ともなすわめでなん
とらまでおとせすり、法返し、
かくとはりてなん、伊予従への法悦きこゑさせ侍らん、戸ハ

いはずはべらぞ、さらに一とせのうちになん、保つまじく侍
らん、法文もいつでか侍らんぜざきさくべらむとすらん、法
か名らはられよりもやすき功けぐらん
こゝのたちはいかもとうりもお童じけうしにいみじきこと
やうをさん入りける、二の巻にぶちとぐもたんべうあ
給ふらずあれ、